

○ヒトツバハギの種子散布 (富樫 誠) Makoto TOGASHI: Seed scattering of *Securinega suffruticosa*

文部省から補助金を得て、牧野先生の標本の整理に多数の植物学者が参加していた頃、小生は毎日のように先生のお宅に通っていた。そのある一日(10月17日)小生と標本を整理中の某氏が、何かガラス戸の外でピチピチと音がするのに気がついた。翌日気をつけて見るとヒトツバハギの種子が勢よくはね出しているためと判った。このヒトツバハギは牧野鶴代さんによると、花房幸四郎氏(故花房公使の子息)によって朝鮮からもたらされた一株で、地下茎によって殖えて当時は大きい数株になっていた。その後一週間にわたって観察して見ると、種子の放出は晴天の日に限り、午後の温度の上った時刻が最も盛んであった。晴天の日には午前10時頃からぼつぼつはね出すことがあるが午後1—2時頃になると、放出は目ざましくなって、ピチピチという破裂音と同時に、種子を数mも勢よく飛び散らすのである。その時飛散する種子が葉を打って動かすのが見える。ヒトツバハギの朔果は3室に分れていて、各1室の中に2個ずつスイカを6個に切った型の光沢のある褐黒色の種子をおさめているのであるが、破裂の直前にも胞背側に縦に一寸凹んだ条が見えるだけで、誠に何気ない風を示している。破裂する果皮はそこで分れ、3個の破片となって落下するが、同時に内外(?)の果皮が分離するので、実際には1個の果実について6片ができることになる。割れた内、外の果皮を較べて見ると、内果皮の方が強く内曲している。恐らく内果皮の反転力で種子を弾き出すのであろう。

コクサギの種子が内果皮で放出されるのはよく知られた事実である。また、シラキでは放出された種子が白い糸(胚珠柄の附近から出た導管内のラセン肥厚部が細胞膜の本体からはずれて伸びたものであろう)で垂下することが知られている。人界から遠い野外の植物の生態にはとかく見逃されている部分があるものであるが、この放出の機構が専門学者の手によって詳しく研究されれば幸である。英語ではこのような種子散布の型式を *xeribole* というそうである。ギリシャ語で *xer* は乾、*bolus* は投げるで、乾投型の種子散布ということであろう。(武田研究所)

□ The University of Tokyo Scientific Expedition to the Andes, 1960: **Andes 2, Excavations at Kotosh, Peru, 1960** Kadokawa Publishing Co. Tokyo (1963) pp. 210 pls. 178 東大のアンデス学術調査の内、1960年のペルー、コトシでの考古学的発掘の報告である。それだけならばここに紹介する必要はないが、抄録者前川が発掘現場の自然環境として植生を担当して記述した部分が pp. 23-36 にあるので紹介した。ペルー全般の植物帯で10帯にわけた新区分を著者の踏査から提案し、さらにコトシの現在の植生と過去の植生の推定とをのべた。地理班が記述した図版の内1-9枚は植物をよく示している。頒価58\$は相当な高価だがこれは考古学の図版のためである。著者の手元に別刷が若干あるので特に御希望の方は御連絡頂きたい。(前川文夫)